

関東大震災救護運動における賀川豊彦と本所基督教産業青年会の成立過程に関する一考察。

○ 敬和学園大学 山崎ハコネ (5315)

キーワード： 東京基督教青年会 興望館 セツルメント

はじめに

賀川豊彦は、1923年の「一度に数十万人の貧民を作った」関東大震災復興のためにいち早く救護運動に身を投じている。その働きは、本所基督教産業青年会を産み、特に本所区(現在の江東区)を中心に基督教セツルメントを意図的に始めている。杉山博昭(2015)は、「質量とも、東京で最大のセツルメントになっている」と評価している。

1. 研究目的

本研究は、賀川豊彦と本所産業基督教青年会が関東大震災救援を契機にどのような震災救護運動を展開していくのか、その実態の過程を解明していくことである。特にその成立過程において、深く関連している5つの基督教団体などを取り上げる。具体的には、東京基督教青年会の支部として本所基督教産業青年会「IYMCA」の事業が始まっていることから、東京基督教青年会、賀川系グループとして神戸イエス団、「イエスの友」会、救護活動地で関与している興望館とカナダ・メソジスト婦人伝道社団、日本基督教婦人矯風会等の団体である。それぞれの組織がどのような経緯で直接的間接的に関与し、いかなる手続き等を踏んで構造化されたのか、また、どのような協同関係を築きながら、「そこで人格的接触を保ち、その地域向上のために努力する」ことができたのか、それぞれの基督教団体のミッションや事業概要等を整理、比較しながら基督教とセツルメントにみられる社会福祉実践の関連性を明らかにしていくことが目的である。

2. 研究の視点および方法

そこで、研究対象期間は1909年から1925年までとした。それは、賀川豊彦の関東大震災救護運動が「神戸の仕事はその儘ここへ持ってくる」という実践仮説をもって意図的に開始されたことによる。言わば、賀川の出発点となった1909年の救霊團事業から展開・発展してく神戸イエス団と「イエスの友」を視野に置き、賀川が全米大学連盟の招きで渡米する1925年までとした。とりわけ、賀川豊彦と本所基督教産業青年会の成立過程に関連する先に列挙した5つの基督教の団体、施設の関東大震災前後の3年間の動きに注目し、各事業主体のミッションに関連する教派、伝道の特徴や社会事業等の事業内容を整理した。また、賀川豊彦を軸として本所基督教産業青年会の成立過程に関係した主要人物たちを対象に所属する組織の中での位置やそこで何を求めていたのか、本所基督教産業青年会の成立過程において如何に関与し支えたのか、賀川のセツルメント思想はどのよう

に継承されたのかなどの視点をもって総合的に検証し考察を行った。関係する『年史』や歴史資料、その他の史資料や関連文献にあたり、実証的に検証を行った。

3. 倫理的配慮

「日本社会福祉学会研究倫理指針」を順守して研究を行った。また、研究対象となる施設や関係者には不利益を回避するために、口頭及び文書で説明し了解と協力を得た。

4. 研究結果

賀川豊彦の救護運動はキリスト教界を軸として教会、教派、青年会、婦人会等のキリスト教団体等を超えて、東京市、東京府、内務省と一般市民の救済運動が「局部的に重複」を回避し「大きな協同作業」のできる「隣人会」を展望していたことから、今日の「住民と行政の新たなしくみづくり」という地域福祉実践の原点とされる方向性が見られた。

本所基督教産業青年会は、東京基督教青年会の「救護及び新事業」として理事会承認(1923年10月16日開催)というプロセスを踏んでスタートした。IYMCAと呼ばれた経緯がそこにある。しかし、同年11月5日の理事会において「救護事業終了」が可決された経緯には、関東大震災において東京基督教青年会の建物が全壊したことや、経営状態の悪化などの理由もあるが、何よりも、賀川の意図するセツルメント思想においては、冬に向かって布団の必要性を呼びかけていた。そうした、長期的にかかわりをもっていた。生活者の主体形成、自立支援を展望していたことなど捕らえ方の相違が大きいといえよう。賀川らの考え方に賛同していた山本邦之助、荒川哲次郎、石田友治ら3主事のうち、山本と荒川が東京基督教青年会を離れた。その後、本所基督教産業青年会の事業は、東京基督教産業青年会から独立、建物及び設備の全部が「賀川豊彦氏に譲与する」ことが決定し、①宗教部を支柱に②教育部、③調査部、④社会事業部、④組合事業部等と多岐にわたって活動が展開された。興望館焼跡地を2年間無料で使用する契約がYMCAと興望館からなる「協力委員会によって承認」され、本所基督教産業青年会の代表賀川豊彦と、興望館の管理、経営主体である在日カナダ・メソジスト婦人伝道社団で代表理事イザベラ・ブラックモアとで結ばれた。理由書によれば、土地貸与は両者の「伝道ノ目的」「同一ニシテ」という成立に至る背景によって実現した。

5. 考察

賀川と本所基督教産業青年会の成立過程に関与した東京基督教青年会、興望館、日本キリスト教婦人矯風会はいずれも超教派的な活動で、セツルメントとみなされないにせよ宗教部、教育部、地域に根差した社会事業が展開されていた。密接な協同関係が形成されていた。賀川は「日本で最も必要」なのはセツルメントであると主張し、賀川のセツルメント思想の果たした役割は、生活者の主体形成に貢献したと言える。